

ファウンテングローブの日本人「貴公子」

ゲイ・ルバロン著

門 田 明 訳

1875年春のことであった。その日、サンタローザ駅（Santa Rosa depot）で、サンフランシスコ＝北太平洋鉄道（San Francisco and North Pacific Train）の列車から降りた、埃まみれの五人組の旅行者たちは、きっと予期していた以上に好奇の視線を浴びたことであろう。どう見てもそれは、珍しい一団だった。50代なかばの長身の顎ひげの人物が、どうやらその団体の引率者のようであった。一人の中年婦人と、つぶらな目の、小柄な男の子が彼につづき、それにもう二人若い眉目秀麗の日本人が居て、これが一番人目をひく原因になった。この二人は、東部の最新流行の服装をしていた。

この一団はニューヨークから来たのだった。年輩の人物はトマス・レイク・ハリス（Thomas Lake Harris）で、特に「メシア的風貌（Messianic look）」¹⁾の持主として、しばしば書物に描かれているが、新生兄弟社（the Brotherhood of the New Life）の「父（Father）」であり、「中軸（Pivot）」であり、「監督（Primate）」であり、「王（King）」であった。彼は、何百人という弟子のために、「生活拠点（home centre）」をつくり、よく吟味した土地を手に入れ、「ファウンテングローブ（Fountaingrove）」²⁾と名づけ、ブドウ酒をつくろうと、やって来たのだった。婦人のほうはミセス・ジェイムズ・レイカ（Mrs. James Requa）であった。彼女は未亡人で、コロニーでは「黄金のバラ（Golden Rose）」という名で知られていた。子供は彼女の息子で、アーサー（Arthur）であった。

東洋人の見本として弁髪中国人だけを見馴れていたこの辺境の地で、当然注目を浴びることになった二人の「日本人」（Japander）は、長沢鼎と新井奥邃であった。彼らはトマス・レイク・ハリスの弟子であり、新生社のメンバーであり、また合衆国への日本移民の先駆者となった人物であった。この二人がどのようにしてサンタ・ローザに来ることになったかを物語るとすれば、幕末日本の諸藩の紛争に端を発し、サンタ・ローザ峡谷のブドウ畑に幕を閉じる、政治的術策と国際的冒険の長い放浪の旅（Odyssey）について語ることになる。

9年前³⁾、ニューヨーク州の海岸からずっと奥に入った、ハリスのプロクトン・コロニー

1) 原文の引用句は「 」を用い、訳出上の便宜から用いた“ ”と区別した。

2) Fountaingrove とも綴られるが現存する門柱銘板にはFountain Grove と二語に刻まれている。

3) 薩摩留学生6名（吉田己二・鯨島誠蔵・森金之丞・市来勘十郎・畠山丈之助・磯長彦輔）がプロクトンの新生社に入ったのは1867年であり、8年前とするのが正しい。以下若干年代に混乱が見られる。Jones 氏による巻末の年譜参照。

(Brocton colony) に 6 人の若い日本人が到着し居住者の間に少なからぬ興奮を惹き起こした。珍らしい隣人の去来には慣れていたはずの住人でさえそうであった。ニューヨークの田舎の肥沃な峡谷が、19世紀の彼らの「社会運動 (movements)」に分不相応な実りを生み出すことになったからである。

1866年はアメリカに日本人がは入って来はじめたばかりの頃である。1860年の国勢調査では、合衆国に日本人が居た記録はない。1870年迄の数字を集計しても、10年間に日本生れであると主張する居住者は僅か73人を数えるに過ぎない。若松製茶・製絹コロニー (the Wakamatsu Tea and Silk Colony) が、通常最初の渡米日本人定着者と見做されているが、これも1869年になり、カリフォルニア州エル・ドラド郡 (El Dorad County, California) に設立されたものであった。『合衆国歴史統計1789—1945』 (Historical Statistics of the United States 1789 to 1945) の年間移民統計表は、1861年、日本人が一人アメリカに渡来したことを示している。その後4年間、これに続くものは一人も居ない。しかし1866年7人の日本人が合衆国に入国したということが移民記録の中に述べられている。これらの数字は、その年ハリスのコロニーにやってきた若い日本人学生が、合衆国に来た最初の8人の日本人の中に数えられたのかも知れぬということを想像させる。またこういう事情であったから、彼らが鄙びた田舎のショトーカー郡 (Chautauqua [ʃə-tō:kwə] County) や、また後にソノマ郡 (Sonoma [sənoʊmə] County) に降り立った時には、ほかの天体から来た人間のように見られたことであろう。どのような事情で彼らがそこに来るようになったかといういきさつも、波乱に満ちた浪漫的物語であるが、それにもまして注目すべき事柄は、新生社の強力な指導者であり、人の心を深く捉えるトマス・レイク・ハリスと、何世紀もの孤立状態を捨て東洋の強国に変貌しようとしていた日本という強力で神秘的な帝国とのつくりあげた結びつきである。

アジア研究家は1860年代中期が日本史の転換期であったと理解するようである。250年の徳川家による支配が、内的不統一状態で終りを告げようとしており、長年外国の影響から完全に保護されていた日本人は、突然出現した欧米の通商利害がもとになって、対応策もなく、分裂させられたのである。西国の強藩薩摩の指導者たちは、1863年英国によって鹿児島に加えられた艦砲射撃を目撃したことがきっかけで、西欧諸国の力を最初に認識することになったが、もっと大きな紛争が起った場合、欧米の戦闘力の前に全日本が無力な存在だということを、いち早く理解したのであった。薩摩藩主島津忠義は、日本と西欧世界の相互理解を深めようと、他に先駆けて積極的な一歩を踏み出したのである。先ず、徳川家を権力の座から降ろそうとしていた隣国長州藩の若い武士と自国の軍事力を彼は結びつけた。次に自藩の青年武士の中から、藩内の最も優れた学生15人をえらび、イギリスに送って別世界のやり方を学ばせようとした。

4) 15人は次のとおりである。

変 名	年令	実名	変 名	年令	実名
上野良太郎	28	町田民部	永井五百介	21	吉田己次

鹿児島からの乗船は極秘裡に行われた。日本人は西欧諸国を訪れることを許されていなかったし、ヨーロッパ文明の影響に反対する大衆感情が、「尊皇攘夷」の叫びとなり民衆の声となって、澎湃と高まり、数々の血生臭い暴動の到来を告げていたからである。そこで、この旅行は単に違法行為であるばかりでなく、人々のそしりを免れず、きわめて危険なものになるだろうと考えられたのである。15名の学生は、外国で暮す間故郷にとどまる家族に危害がおよばぬよう、また出発の時と同じように本名を覚られず日本に戻るよう仮の名を名のったのであった。後になって、学生の一人は、20人が行くはずであったが「町田某は出発に際し発狂の気味があったので、我々一行より一名を減じ⁵⁾」た、と回顧している。この一事から、この出発の緊張がどのようなものであったか、推し量ることができよう。

青年たちは、そのほとんどが、18乃至19才であり、4名の年長者が同行した。⁶⁾一人は薩摩藩の重臣であり、今一人は藩の教育最高責任者、それに二人の通訳であった。選抜された中の最年少の学生は磯長彦輔であり、裕福な儒学者で、石彫家であり天文学者でもある人物の子息であった。彼は四書五経を諳んじ、天才少年と考えられていた。⁷⁾彼は藩主によって渡英のため選抜された時、12才であった。⁸⁾磯長彦輔は渡航に際し、長沢鼎という名を与えられたが、後年次のように回想している。学生たちは喜んで自分の氏名を棄てた。「ほとんどの名が古くさいものであるのに対して、自分達は未来を望む青年だった」からだ⁹⁾と。

橋 直輔	2 3	村橋直衛	松元誠一	3 1	高見矢一（土佐人）
杉浦弘藏	2 3	畠山良之助	岩屋虎之介	2 3	東郷愛之介
三笠政之助	2 1	名越平馬	塩田権之丞	1 9	町田申四郎
野田仲平	2 1	鯨島誠藏	清水兼次郎	1 5	町田謙次郎
浅倉省吾	2 3	田中静洲	長沢 鼎	1 3	磯永彦助
吉野清左衛門	2 5	中村宗見	松村淳藏	2 4	市来勘十郎
沢井鉄馬	1 9	森金之丞			

——『薩藩海軍史』中巻 898頁

5) 驚津尺魔『長沢鼎翁伝』に「長沢鼎君曰ク」としてこの記述がある。また『畠山義成洋行日記』に元治二年二月二日付で「町田猛彦殿不快」とある。一福井迪子『畠山義成洋行日記』翻刻（鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報第6号60頁参照）

6) 「4名の年長者」は次のとおりである。

変 名	実 名	役 名
石垣鋭之助	新納刑部	大目付御軍役日勤視察
出水泉藏	松木弘菴	御船奉行・教育掛。英蘭学に長したり。
	(寺島陶藏)	
関 研藏	五代才助	御船奉行見習・初測量者蒸気船カピティン・視察
高木政次	堀壮次郎	長崎人・英通弁者

——『薩藩海軍史』中巻 896頁

7) 「父孫四郎ハ薩藩ノ儒者デ名筆ノ聞エ高ク、当時、碑銘ハ多ク孫四郎先生ノ録スル所ナリト伝ヘラレテイル。且代々鹿児島天文台ヲ司ッテイタ所カラ見ルト当時ノ天文学者テアッタノダ。

四男彦輔ハ七、八才ノ頃カラ非常ニ記憶力ノ強イモノト見エ四書五経ノ文句、唐宋ノ詩ナドヲ暗記シタノデ、来客ノアル毎ニ詩文ノ朗読ヲナシテ人ヲ驚カシタトイウ事デアアル。」驚津上掲書。「石彫家 (stonecraver)」とあるのは書家とすべきであろう。

8) 長沢鼎の戸籍上の生年月日は嘉永五年二月一日（1852・2・20）、幼名磯長彦輔である。元治二年一月十八日（1865・2・13）藩主より長沢鼎の氏名を賜わったとあり、当時12才12ヶ月であったことになる。

9) 出典不明

この東洋の長い放浪譚の内容は、1924年インタビューをうけた長沢鼎が詳しく明らかにし、サンフランシスコの日本語新聞、日米タイムズによって、18回の連載で公刊された。他の15人の薩摩藩士については、東北大学教授林竹二氏の労作が全般的な知識を与えてくれる。氏は、西洋が日本文化に対し、最初どのような影響を与えたかを研究してこられたのである。¹⁰⁾

青年たちは、文字通りの意味でも、また比喩的にも、後を振り返り振り返り1865年3月23日夜、英船オーストレイリアン号（Australian）に乗船し、薩摩の藩都を出発したのである。¹¹⁾香港で彼らは西洋風に髪を刈り、新しい服を買い、二番目の船に乗り換えた。シンガポール、インド、スエズ経由でサザンプトンまで航海することになっていた。幼い長沢鼎は香港をたつ前に、それまでうなじのところで結んでとめてあった長髪を注意深く包装し、故郷の母に送った。¹²⁾5月23日、彼らはロンドンに着き、ケンジントン・ホテル（Kensington Hotel）に部屋をとった。¹³⁾

彼らに関心をもち、日本について知識のある、ロンドン在の数名の人びとが、すぐに彼らの援助にやってきた。ウィリアムソン教授（Professor Williamson）という人物の助力で、彼らはロンドン大学に入学し、短い滞在期間であったが、そこで充分英語を学びまた、「日本に関する政治思想の若干」を学んだのである。彼らはグレン教授という人（a Professor Glenn）の監督の下に、ある家庭には入った。このグレン教授は日本西欧化の擁護者として大いに働き、あらゆる機会をとらえて、自分の新しい優秀な学生たちに民主主義の主角を演じる国が興隆し、帝国主義的な影響は衰退しつつあることを指摘した。長沢は、グレン教授が繰返し、「ロシアはそれほど強力ではなく、合衆国が優れている。それで英語を学ぶことが非常に重要だ」と言っていたことを追憶している。¹⁴⁾グレン教授は英米の政治法律を完全に理解することによって、はじめて日本近代化のために西洋思想を応用してみることができだろうと、彼らに説いたのだった。

学生たちは、一般家庭に住み、充分勉強するために、イギリス全土に散らばった。その年の末に、7人を除いて、最初の一行の全員が、明治維新を生み出し日本の封建体制を廃

10) ここで参照されているのは、林竹二氏の「森有礼とトマス・レーク・ハリス」（「日米フォーラム」9巻3・4号）及び「幕末の海外留学生」（「日米フォーラム」10巻1・2・4・6・7号）である。

11) 元治二年三月二十二日（1865・4・17）朝、串木野郷羽島浦を出航している。藩都出発は、これより2ヶ月前、元治二年一月二十日（1865・2・15）である。（『薩藩海軍史』中巻 891～5頁）

12) 断髪について鷲津の長沢伝は、長沢の言葉として「羽島デ英国汽船ニ乗ル時髪ヲ切ツタ。同行者町田誠蔵モ切りマシタ。私等二人ダケ汽船ニ乗ル前ニ切りマシテ、ソレヲ故郷ニ届ケマシタ」と伝えている。また『畠山義成洋行日記』は三月廿三日（洋暦4・18）付で「海上平穩ニテ一行ハツ後髪ヲ切り西洋髪ニ相成候」と記している。

13) ロンドン着は慶応元年五月二十八日（1865・6・21）である。

14) 鷲津「長沢伝」に「曰ク露国ハ強ナラズ義ナラズトノ主説ヲ持セリ。曰ク米国ヲ以テ善隣尊ブベキ国ト認メタリ。曰ク英語ヲ以テ学問ノ捷徑ト認メタリ。曰ク法制ノ学ハ日本ノ事実ヲ案シテ折衷スベキナリ……」とある。ただし、これはグレン氏の言葉ではなく森有礼が兄安武に送った書簡の内容を鷲津が要約紹介したものである。

止する革命を準備するために、日本に戻った。¹⁵⁾

残った7人は西洋世界を更に探険した。二人がロシアに、一人がフランスに、二人がアメリカにおもむいた。長沢鼎はやがて14才になろうとしていたが、まだほんの13才の子供であったので、もっと勉強するため、スコットランドに送られ、アバディーン¹⁶⁾のグラバー家で暮した。

ウィリアム、グレン両教授とともに、もう一人のロンドン児が、日本人青年来訪者の世話をした。童顔の美青年で国会議員であり、日本の状況について並々ならぬ知見を備えた人物であった。ローレンス・オリファント (Laurence Oliphant) がその人で、日本には二度訪れ、一度は英国公使館の一等書記官として来訪し、また今一度の旅行の際は、それが起縁となって『エルギン卿中国・日本見聞記』 (Narrative of the Earl of Elgin's Mission to China and Japan) と題する書物を出版している。

日本を訪問後何年かして、オリファントはトマス・レイク・ハリスの影響を受けることになった。1859年、ハリスがスエーデンボルグ教団 (Swedenborgian) の後援でイギリス行脚をしていた時、オリファントはこの空想的社会改良家の卵に出会ったのであった。日本人たちがイギリスに到着する頃には、もうラウアリー・オリファント (Lowry Oliphant) はメイフェア・カフェ (Mayfair Cafe) の社交会の寵児であった放縦な生活を精算してしまつて、母のレディー・マライア・オリファント (Lady Maria Oliphant) といっしょに一家の財産を捧げてハリスのニューヨーク・コロニーに加わろうとしていた。オリファントは留学生一行を、どうやら良く知るようになっていたようである。なぜなら、オリファントがハリスを呼ぶのに「生孔子 (a living Confucius)」という東洋風の呼称を使って尊敬の念をあらわし、トマス・レイク・ハリスについて生徒たちに話して聞かせたと林氏が述べているからである。これを見るとラウアリーが、学生たちを充分良く知っていたればこそ、恐らくその一年、彼の心にとって最大の関心事であった宗教的議論を吹き掛けたように思えるからである。

アメリカに渡ったグループの中に、野田と永井という「新しい」名前で知られていた、鯨嶋誠蔵と吉田己二の二人がいた。彼らは、トマス・レイク・ハリスとの連絡法について、

15) 留学生たちの動向は次のとおりである。慶応元年六月二十八日 (1865・8・19) 磯長彦輔アバディーンへ出発。慶応二年一月 (c. 1866・2) 中村宗見・田中静洲フランスへ去る。同年六月下旬 (c. 1866・8) 町田民部・町田謙次郎・町田申四郎・名越平馬・東郷愛之進・高見弥一6名帰国。同年六月二十一日 (1866・8・1) 森・市来ロシアへ、畠山フランスへ、鯨島・吉田アメリカへ旅行。(『海軍史』中巻 911頁、犬塚孝明『薩摩藩英国留学生』(中央公論社、昭和49)年表参照)

16) 林氏は前述の日米フォーラム掲載の論文で、海門山人『森有礼』から次の一節を引用しておられる。「…鯨島・寺島(吉田の誤り)両人は、オリファントに伴い、米国に遊ぶ。船中、談、道德宗教の事に及ぶ。両人孔夫子を宗とするを説く。オリファント曰く、孔子既に云って亡し。ただ其遺書あるのみ。今日宛然生孔子あり、ハーリス先生という。……」『松村淳蔵洋行談』(『海軍史』中 909頁)中にも「…吉田氏等常に孔子が聖人である誰は賢者であるヲ話せしに、「ヲリハント」曰く、予は今米國に行き生きた聖人に面会する筈なりと語りしより、随行を望みしものと聞かれぬ。…」とある。

オリファントからの指図を受け、その紹介状を持って、ニューヨークに着いた。ハリスにとっても学生にとっても、ともに幸福な出会いであった。

ハリスは日本に大きな関心をもっていた。それは、書物で神道のことを知って以来のことであった。彼の印象では、神道は「母の道」(Mother's Way)であり、ハリスの女性的神概念なるものを今の世に保つものであった。ハリスの内弟子であり「ボズウェル (Boswell [bɔːzwəl])」と呼ばれていたアーサー・カスバット (Arthur Cuthbert [kʌtəbət]) は、彼のハリス伝の余録の中で、日本を対象とするかなり広汎な計画を説明している。

世の貴族たちが、全て、全体として眺めれば、その民族の心に宿りそれを向上させようとする神の息吹きに対して、不思議なことから、有害な影響を与えることが知られている。しかし一方で、この息吹きと一致する中核的人格すなわちハリス氏その人が、“日本を支配する天皇家と日本の古い貴族 (the old Princely Nobility of Japan) の末裔は、現今もっとも偉大且つもっとも高貴な例外であり、また将来においてもそうであろう”という確信を常に表明してきたのである。

彼は心にこの熱烈な希望を抱いていたが、その理由はこうである。古来の神道という宗教・伝統の中で、天照大神 (Divine Mother) 崇拝が中核にあって影響し、物事を動かす原動力となっていること。また、この崇敬の念は、天照大神の高御座—(地上を低迷する雲の上にその高峰のほとんどを現して聳え立っている) 富士山 (Fusiyama)—から、至高のものとして、日本人すべての心に君臨していること。更に、玉座にある皇帝とそれを取り巻くすべての貴族たちからも、この崇敬の念が全地の表にちらばる多数の農民大衆のすべての心にくだってゆくこと。これが彼の希望の理由なのである。

天照大神は「聖霊」(Holy Ghost)である。神の花婿を胸に抱き包み、それと一体となったこの女神から、祝福を受けた全ての天使 (Fays) の軍勢が流れ出て、結合し、彼女を愛し崇敬するすべての者の肉体を今こそ形造るのである。この神的女性 (Devine Feminine) というものが、大きな改革の力となる。

こうして、古くなり廃虚と化した肉体を再興し、今は死が支配しているこの廃虚の真中に決して死ぬことのない新しい肉体の基を礎くのである。

このようなところに、信仰に燃えるオリファント氏から正式に紹介されて、二人の「日本の古い貴族の末裔」がやってきたのである。それは将にトマス・レイク・ハリスが彼らに教えねばならぬことを学ばせるため、天が送ったものであった。たとえ中核になるハリスその人 (pivotal man) が日本に行けなくても、彼の天国 (spheres) に、その聖なる支配階級 (hierarchy) が受け入れられることになる一国家、つまり日本が、彼のもとに來たのであった。

藩主など廃することによって、日本を封建主義から開放しようという薩摩の断固たる意図と自己の信念とを、ハリスがこの青年「貴族」の中でどのように調和させたかについては何の記録もないが、日本の未来の指導者達がトマス・レイク・ハリスのもとに来たのは、たしかな事実であった。野田（鯨島）と永井（吉田）は、彼らが始めて出会った経験について、他の5人の学生と直接話すため、ロンドンに戻ったが、彼らには、ハリスについてまた彼らの主張に対するハリスの関心や熱意について、話すことが山のようにあった。ハリスの最も古い弟子であり、後になって（それも、ずっと後になって）彼の妻となったジェイン・ウェアリング（Jane Waring）とハリスは、同じ年、遅れてロンドンにやってきて、丁度ロシアから帰ったばかりの沢井（本名森有礼）に紹介された。¹⁷⁾ またグラスゴーで長沢鼎に紹介されたのである。ハリスは帰国した時、日本の学生たちが、彼らの仲間に加わるだろうという判断を持っていた。彼ら6人、野田（鯨島）・永井（吉田）・沢井（森）・畠山・松村（市来）と長沢が合衆国に来た頃には、まだアミアニア（Amenia [ə-mi:niə]）に古いコロニーがあり、彼らはしばらくそこで過した。その後、ニューヨーク州を横断して、もっと設備のととのったプロクトン（Brocton）に移動したのである。

ハリスは直ぐ仕事に着手した。長沢は後年インタビューに際して、ハリスは“自分の教えるキリスト教を信仰することによって、日本人として他に模範を示さねばならぬ”と彼らに教えたと回想している。もちろん、その目的は、地上に天国を築くことであり、日本文化は他の文化よりこのゴールに近いのだから、この日本の若者達が、その道を先導せねばならぬ。彼らは日本で他の人びとを教えねばならぬが、彼らの故国が「無味乾燥なキリスト教」（plain Christianity）を受入れるのを促進させるようなことがあってはならない、というのであった。

6人のうち、野田（鯨島）〔永井（吉田）の誤りか？—訳者〕畠山・松村（市来）の三人は、ハリスからのこの最初の指示に従って、ニュージャージー州ニューブランズウィック（New Brunswick, New Jersey）のラトガス大学（Rutgers [rʌtɡəz] University）に入学した。そこには数人の他の日本人学生がいて、教授たちは日本に非常な関心を持っていた。森有礼、鯨島清蔵と、今は16才の長沢鼎は、ハリスのもとに留まる道を選んだ。

選民たるか否かはともかく、日本人は間も無く聖務（Use）と呼ばれている生活が荷酷なものだということを知った。若い鼎は野良仕事に出、森はパン焼と台所の手伝いをして働いた。日曜には全員が洗濯をした。後年、鼎は、「きびしい日日（hard times）」¹⁸⁾ だったと回想している。「明治元年」プロクトンへの移転が完了した。この移転も学生の

17) 上掲海門山人によれば、ハリスの訪英は1867年春とある。森がロシアから帰英したのは1866年9月10日（森有礼年譜「森有礼全集」第1巻）である。

18) 「アミアニアの日本人が全部ここ（プロクトン—訳者）に移って、モンソン組と合流したのは、（1867年—訳者）12月末であった。（林竹二「森有礼研究」1968年3月、東北大学教育学部研究年報第16集、140頁）

生活改善に、ほとんど役立たなかった。森はコックとして働かされた。食事の準備をせぬ時は家事に専念した。鼎は牛に餌をやり、乳を搾り、ハリスが計画していた新しいブドウ畠のために、ブドウ棚の支柱を切った。長沢は後年、プロクトンに居た時に自分は農業について多くのことを学んだ、と回想している。

聖務に明け暮れる生活は、このような謙虚さを必要と感じてこの新生社にやってきた富裕なアメリカ人やイギリス人改宗者のために、意図的に行われたスパルタ的生活であったが、絹にくるまり東洋的逸楽の香に包まれて成長した日本の少年たちには、苦行に近いものであった。¹⁹⁾ 鼎は新しく耳にする英語を練習するため、18才の冬に日記をつけた。そのあちらこちらを読むと、プロクトンの台所の塵捨場 (Kitchen middens) での青春が、彼の目指すべき人生から如何に遠いものであったか、推し量ることができる。

日がたつにつれ、毎日がますます困難となり、光明もない。

今日は私にとってとりわけ困難で、苦しい一日だった。ドヴィ小母さん (Aunt Dovie) (ジェイン・ウェアリングの修道名 [use name]) が夕食の皿を拭いた……。

ゴールデン・ローズ小母さん (Auntie Golden Rose) の話では、今晚ファーザーが“私を破滅させようとする仏教徒と昨夜ひどく争った”とおっしゃったということだ。ドヴィ小母さんが戻るまで、私は一日中気がめいり、ひどくみじめな気持だった。小母さんが慰めてくれるので、とても幸せに感じる。

長沢は後年次のように回想している。ハリスの宗派についての彼の第一印象は、それが「深遠な豫言」であり、「到底我等ニハ奥義が解セラレナイ」ということであった。²⁰⁾ 彼が仕事をしながら、これが6年前日本で選ばれ特別な使命についた真の目的であるのかどうか、疑問を抱いた形跡はどこにもない。日記には、この聡明な少年が、与えられた仕事を素直に受入れ、皿を洗い、走り使いをし、七面鳥の小屋を建て、家を修繕し、野菜畑に種を播いたことが仔細に述べられている。「今日の午後は鶏小屋の掃除などして過した。とても楽しく過した」というような工合である。

長沢の死の30年後、彼の姪がテレビ・インタビューで、叔父が旦って口にした妙な言葉を回想している。²¹⁾ 伊地知ヒロの記憶では彼はこう言ったのである。彼の一生は、良くなったり悪くなったり連続で、ひどい嵐の中に居るようなものだった。彼と同じ経験をすれば、他の人間なら「駄目になっていた (break down)」だろう、と。おそらく彼の耳にはプロクトンの七面鳥小屋や台所の流しの物音が聞こえていたのだろう。

いろいろ曲折はあったものの、合衆国へ来る日本人来訪者たちは、どうやら、プロクト

19) 当時の薩摩藩での青少年教育のきびしさを考えると、この論評は当を得ない。

20) 引用は『長沢伝』

21) 長沢の姉モリ (弘化1・12・8生) の二男伊地知共喜夫人ヒロ。

ンで暫くの時を過すのを、一つの名誉と考えるようになったようである。ハリスとオリファントの比較宗教学的的研究で、決定版とも言うべき書物を著わしたヘルベルト・W・シュナイダー (Herbert W. Schneider) とジョージ・ロートン (George Lawton) は、次のように報じている。コロニー全体では、20人の日本人がいて「ハリスもオリファントも共にこれらの日本人に特別な関心を持っていた。 イングランドや東洋からの渡航費を支払うことのできない者に対して、オリファントはイギリスの友人クーパー家 (The Cowpers) から直接に、あるいは同家を通じて間接に、資金面で援助してもらえるよう、手筈を整えてやった。彼は、西洋人に比べ日本人の方が、より簡単にハリスの教に従って行動するようになるだろうという理論を持っていた」

オリファントは到着後間もなくクーパー家宛に手紙を書いて、このことを詳細に説明している。

ここに来てこの生活を見ないうちは、誰も「神の忠僕 (Faithful)」ハリスの教を本当に理解することができない、というのが我々の意見だと、日本人たちは言っています。余人はいざ知らず、彼らの場合、その心が開かれているため、将にこの宇宙に充滿している愛と清浄なるものの根源にある力を彼らが実感する故に、こんな言葉が出てくるのです。しかし心の閉ざされた普通の西洋人は、微妙な影響力には気付かぬのです。それが、もっと強くなれば……あるいは彼らも気付くのかもかもしれませんが。

ユース (the Use: コロニーの別名-訳者) の中で、ハリスは「神の忠僕である父 (Father Faithful)」と呼ばれていたが、彼は日本人来訪者に対する成功に感動したのであった。ブロクトンの母屋 (manor house) ヴァイン・クリフ (Vine Cliff) を「日本人たちがカレッジの入学準備ができる学校のようなもの」にしてはどうかというハリスの計画のことを、長沢鼎は日記に記している。鼎はこう書いている。

計画は「趣意書 (circular) を印刷し、それを日本語に訳し、日本に送ろう」というものだった。「ファーザーは、“自分の学校はいわゆるキリスト教を教えるものではない、というつもりだ”、と言った…。ファーザーは“ヨーロッパでもアメリカでも、最も知的で賢明な人々が、このいわゆるキリスト教には厭気がさしている……。それは日本で……最も知的な人々が仏教に厭気がさしているのと全く同じことだ”、と言った。ファーザーは、日本に於ても、ヨーロッパやアメリカと同様精神的変革が進行中だ、と言った。あらゆる地域 (sphere) で人々の思想が急速に変わりつゝある。日本にはこの真理を受入れる準備が整っていないながら、まだその知的進歩が完成されていない人々がいる。それは単純、卒直、勤勉、謙遜な人々である。神は謙遜な人を、より容易に、ご自分の道具としてお使いになることができる」

日本人のためのハリスの学校は計画の段階以上に進まなかったが、彼の影響は事実日本

にまで及んだ。薩摩藩主が他の藩主たちと共同で、外国大使が日本に入るのを許可するよう皇帝（the emperor）に上申したという声が、プロクトンに聞えてきた。²²⁾日本の孤立主義の終りを告げる大革命が始まった。日本人たちは帰国しようと思えばできることになった。ファーザー・ハリスは早速古くからいた二人の改宗者森と鯨島に、すぐに発って「新生社の精神で祖国のために尽すように」と促した。長沢は後年、彼の伝記の著者である川勝正之に回想して、ハリスは「建国を助ける」ため二人を故国に帰すようにとの啓示を受け、帰りの運賃を彼らに与えたのだ、と言っている。²³⁾両人は、1868年の初夏に出発し、コロニーに残る日本人たちに船から別れの手紙を送っている。²⁴⁾ローレンス・オリファントはその手紙の写しを親交のあったクーパー家に送り、それがシュナイダー、ロートン共著の『預言者と巡礼』（A Prophet and a Pilgrim）に引用されているが、それは二人の青年とレイク・ハリスがその使命を如何に重要視していたかを示している。

今回、われわれがおもむく目的は、何ら特別なことではなく、われわれの義務を、祖国のために果すにある。不肖の我々が、知識にも恵まれず、その上当今の事変の状況について無知であるのだから、充分役立つものか、判断もつかず想像すら下しえない。このことはよく承知している。しかし行って混迷と闇のただ中に自らを投げ出そうと決めたのは、ひとえに我々が、そうせねばならぬと感じたからである。王制復古のため微力なりといえども犠牲になることが何かの役に立つのであれば非常な喜びであり、充分満足である。更に我々は主なる御父に対し感謝の念を感じ、その思いは本当に強くなる一方である。何故なら、主はその愛する僕T・L・ハリスを通じて、地上のすべての住人の救済のため、休みなく、慈悲の心をもって働きたもうからである。充分な理解にまで達しない者、真実の広い心をもって神的生活（Divine Life）を体現しようと努めない者は、偏見によってハリス氏の教えが真に神学的・宇宙的な要因に基づくのではなく、むしろ狭い宗派心と現世的な要因に基づくものと妄想・夢想するかもしれない。我々は今この問題に立入りたくないが、彼の教えを証しするため一二どうしても言っておきたいと思う。主における人生を見出さんと真に飢え渴く者、また主の愛子とならんと真に飢え渴く者、あるいは世の始に定められた傷なき純粋な状態に立帰りたいたと真に飢え渴く者は、誰しも疑いもなくハリス氏を通じて与えられるその教えに対し、真の認識を持つことが出来る境地にまで達するであろう……。

「新生」・日本（“new” Japan）がその放蕩息子のために用意していた運命は、この手紙

22) 具体的にどのような事実を指すか不明。

23) 『長沢伝』に「長沢鼎氏直話」として次のように記されている

此時ハリス氏神託ヲ森、鯨島等ニ告ゲテ曰ク「日本帝国ハ今ヤ国難ノ急ニアリ、二子速ニ帰朝シ国事ニ尽スベシ」ト、ハリス氏ハ兩人ニ旅費ヲ与ヘテ急キ帰朝セシメタ。」アメリカ関係者の間ではこの『長沢伝』をKawakatsu manuscriptと呼んでいるが川勝正之氏は『長沢伝』を書写した人物であり、鷲津尺魔を著者とするのが正しい。

24) 1868年6月17日「米国を去るに臨んで船上（H. Chauncy 号）より友人たちに別辞を送る」（前掲「森有礼年譜」）

の最初に出てくる謙遜な証言とまるで異なったものであった。吉田、畠山、松村(市来)は森と鯨島の後を追ってすぐ同じく祖国の救援に馳せ参じるため出発した。巡礼者たちは帰還して、3年前彼らを選び日本から送り出した藩主が真に賢明であったことを証明した。世界の中に地歩を固めようと目指す日本で、西洋の言語と西洋の様式を知っているこの学生たちに、指導者の地位が与えられるのは当然のことであった。林氏が考えているように「日本が始めて西洋に『出会った』のは、その可能なあらゆる意味で、これら学生たちにおいてであった。²⁵⁾」

最初の薩摩の15人の一人、寺島藤助は、新政府の初代外務大臣となった。トマス・レイク・ハリスのユースにいた謙虚な永井(吉田)も、一時外務大臣を勤め、内閣の影響のある一員となった。松村は海軍大臣に任命された。ハリスが野田と呼んだ鯨島は、帰国後直ちに日本の初代駐英大使に任ぜられ、森有礼は23才で日本の指導的政治家、外交官、教育者の一人となる人生に船出したのであった。

帰国すると、森は直ちに外交事務を命ぜられ、また軍務に関係させられた。ここで彼は「改革的であり、直言をはばからなかった」その年の内に、彼は新内閣に急進的な提案を具申ししていた。即ち、武士に街上で常に両刀を帯びるよう義務づけた法律は“武士階級に属する者が万一自ら望む場合、身分を示す小刀をはずしてもよい”というように改めるべきだと要望するものであった。当時武士の刀というこの問題は、日本では微妙な問題であった。というのは、多くの保守的分子が旧習を墨守しようとし、変化を恐れていたからである。もちろん刀剣は武士を他の階級と区別するものであり、日本が投捨てようとしている古い封建体制の痕跡を温存するという意味で象徴的なものであった。1868年の段階では森の提案は非常な反対を受けた。彼は「武士の魂」(Spirit of Samurai)をないがしろにする者だとして非難され、ついには全ての官職を離れ、やむなく「故郷(home place)」に引退するという事態にまでたち至ったのである。皮肉なことに2年もせぬうちに政府自身が全国民に対し、公の場で自由意志に基づいて帯刀を廃めることはさしつかえない、との許可を与えることになり、8年とたたぬうちに今度は完全に刀剣を禁止するに至ったのである。森の提案は正しいものであった。ただ時期が早すぎたのである。

鹿児島で、この若い改革者は、トマス・レイク・ハリスの理想を実行に移し、日本の若者に英語(と理想主義)を教える私塾を開いた。一方彼はヨーロッパ流のやり方で陸海軍を編成するよう、しきりに提案していた。彼が公職を追放されていたのは、ほんの短期間のことであった。1870年森有礼は政務に呼び戻され、ワシントン駐在の初代日本公使として合衆国に送り返された。彼は3年間合衆国に滞在し、しばしば旧友や恩師—T. L. ハリスとローレンス・オリファント—をブロクトンに訪ねた。ワシントンに滞在したので、長沢

25) 同趣旨の原文は次のとおりである。

「この時期の留学生において、日本と西洋との最初の「出会い」——そのあらゆる多様性における——が、初発的かつエレメンタルな形で、おこなわれたものではなかったか」(前掲日米フォーラム「森有礼とトマス・レイク・ハリス」93頁)

鼎青年の将来を心配してやることもできた。

鼎はハリスの共同社会に欠くことのできない存在に成長しつつあった。彼はハリスの片腕であり、秘書役（*emanuensis*）になっていて、シュナイダーとロートンの言葉を借りれば、彼の「驚嘆すべき協力の手」を伸べて、脱魂状態で述べられるファーザーの口述を筆記した。彼はまたブドウ栽培を学んだ。ユースに加わるためにプロクトンにやってきたジョン・W・ハイド博士（Dr. John W. Hyde）がブドウの専門家であり、ブドウ栽培を監督しブラザーフッド・ワイン（Brotherhood wine）の製造工程を確立したのである。ハイドから習得した知識によって、鼎は、後年、人も認め尊敬するカリフォルニアきってのブドウ通の一人になったのである。

長沢の援助は、どうやら、日本の公的機関（official Japanese sources）から出ていたようである。というのは、当時のハリスの元帳に、50ドルから437.96ドルに及ぶ「薩摩公」（Prince of Satsuma）からの支払いを示す記載があるからである。²⁶⁾ おそらく薩摩藩の要路からの命令で、鼎は勉学のためコーネル大学（Cornell [kɔːnəl] University）に送られたようである。彼はひどく不幸であった。彼がイサカ（Ithaca [iθəˈkə])の学校に戻らない決心をした1871年1月の日記の記載を見ると、彼の悲嘆のほどがよくわかる。

私はこれほど悲しく不幸な元旦を、これまで過したことがない。自分の心を深く究明する時、私は自分の過去の行い、思い、目的がすべて利己心から出たものだとことを知った。しかし、新年を始めるにあたっての私の切なる望みは、自己放棄によって、より高くより深く主にあって励むことである。

彼はプロクトンの「家庭的交わり（home circle）」に深く共鳴していた。これは組織的なキリスト教教育を授けようとするハリスの態度全般から考えて、当然のこのように思える。「今夜のゴールドen・ローズ小母さんの話では、私は随分生気を無くしてしまったということだ。大学に行ったおかげで、私はひどく傷ついてしまったというのだ。ドヴィー小母さんが、もう私が大学に帰らないでもよい許可をもらうために、コーネル大学の

26) 外務省外交史料館所蔵史料「自明治3年～海外留学生（各府県派遣及個人）関係雑件」中に「北米合衆国カリフォルニア州レー・クラーク葡萄酒造会社在住鹿児島県士族長沢鼎ニ対スル学資過渡ノ義ニ付大蔵省主税局長ヨリ照会之件」なる数通の書類があり、内容は、長沢に対する学資の過剰支払分返納に関するものである。「本人ハ明治六年一月以降三ヶ月分ノ給資ノ如キハ其当時官費給与ヲ辞セントノ決意アリシヲ以テ為替全額ハ其俸時ノ公使へ還付」とあり、それ以上は調査不能ということで処理されている。この日付から考えると、新生社に入ってから、かなりの期間長沢は留学生として取扱われていたと想像される。忠義公史料（『鹿児島県史料』第四巻71頁）慶応2年関係文書中にも「米国留学生」に、松村俊蔵〔淳蔵〕（市来和彦）・永井五百介（吉田清成）・吉田伴太郎（種子島敬介〔輔〕）・杉浦弘蔵（畠山丈之助〔義成〕）・大原金之助（吉原弥次郎〔重俊〕）・白峯駿富などと並んで長沢鼎（磯長彦助）の名前がある。

ホワイト学長（President White）とパトナム先生（Mr. Putnam [pátɲəm]）に2通の手紙を書いてくれた。」

しかし、日本からの圧力があった。（もう一人のコロニー・メンバーである年長の日本人）野村は、ユチ（Yuchi 湯地²⁷⁾）という人物から手紙を受取った。（この湯地なる人物は、送金人として長沢の日記にしばしば言及されている。官職はしめされていないが権威筋の人物であろう——あるいはハリスの元帳の「薩摩公」と同一人物でもあろうか）この人物が長沢宛に「（コーネルの代りにラトガズ（Rutgers [r átgəz]）に出るため）ニュー・ブランズウィック（New Brunswick [nju: bráɲzɯɪk]）にむけて出発すればよからう、と書いてきた。それで私〔長沢-訳者〕はホテルにでかけて行き、彼とそのことをとっくり話しあった。」長沢は明らかに野村と自分の考え方についていろいろ話しあったのだろう。何故なら鼎がニュー・ブランズウィックにむけその旅行をしたという記録は全然無いからである。

長沢が18才のとき、森がワシントン駐在大使として合衆国に戻ってきた。間もなく長沢は首都を訪ねてくるようにと招かれている。しかし、それより早く、長沢とユースのメンバーにとって今も沢井という名で知られている森のほうが、プロクトンを訪ねてきた。長沢は彼の日記にこう記録した。

私はヴァイン・クリップで食事をとり、午後、他の人々と別れて沢井と二人グレンサイド（Glenside [glénsaid]）に行った。彼がそこに着いた時、ファーザーは睡眠中で休息をとっているところだった。しかしお茶の後、沢井と私はファーザーの部屋を訪ねた。私たちはワシントンの家に置く調度品のこと、どういう人物を招待すべきかといったようなことを話しあった。そしてクラークさんとクラークさんの奥さん（Mr. Clark and Mrs. Clark）が指導のために行き、アイダ小母さん（Aunt Ida [áida]）が家事を見るために行けばよいということに決った。沢井は、今回は私を連れてゆかないが、3、4ヶ月先になって彼らがもっと落ち着いたら是非来てもらいたい、と言っている。私は沢井とヴァイン・クリップに行き、彼といっしょにヴァイン・クリップで泊った……。

長沢は日本公使館を訪問するため、事実ワシントンに出かけたが、森は日本に戻るよう彼を説得しようとした。川勝〔鷲津〕の長沢伝に述べられたこの会見の説明には若干混乱が見られるが、長沢少年は、もし森が即刻彼を行かせるならという条件で、行くことに同意したようである。森はこれには賛成せず、がむしゃらな鼎に来年まで待つように要請した。長沢は「来年のことを言うと鬼が笑う。来年のことは実のところ君にもわからんじゃ

27) この野村・湯地については、どのような立場の者か不明だが、林氏の前掲論文「森有礼研究」（第二 144頁）には、大蔵省の各国留学生調（明治4年9月現在）からとして米国の官費留学生中に、鹿児島県人湯地治右エ門・野村市助（これは県費）の名が見える。また野村一介〔市助と同人物か?〕がアミニアのコロニーに加わったいきさつも述べられている。（139～140頁）

ないか」といらいらして答えたと言われている。長沢は頑固に二度と故国に帰らぬと誓い²⁸⁾二人は別れた。文字に残したわけではないが、心に刻んだ誓言であった。

長沢と森との意見の不一致は、別に永遠の溝にはならなかった。何故なら、1871年4月付の鼎にあてた細やかな友情を感じさせる沢井の手紙があるからである。その手紙はまた森がいまだに心の中ではハリスの信徒の一人であることを証明している。何故なら彼は当時の駐英日本大使であった野田（鯨島）と交わした手紙について述べ「私は来年夏ブロクトンで、いっしょに過さないか尋ねる手紙を彼に書いた」と言っているからである。

森が公務出張で合衆国に戻ってきた時、彼は容姿端麗で頑強な体軀の日本青年をともなってきた。この青年は仙台藩の武士で、新井常之進、号を奥遼と称した。新井は24才で既に優れた学者であり、勇敢な武人でもあった。林氏の書物によると、彼は明治維新に引続いて起った反政府運動で、北日本の諸藩を組織する役割を果たしたと書かれている。²⁹⁾1868年仙台藩が降伏した時、新井は船に乗って箱館港に逃れ、そこでロシアの宣教師と知り合いとなり、この宣教師が若い失意の戦士をキリストの教に導いたという。彼はこの道を究めることに強い関心を持っており、森有礼に出会いアメリカに行くことを知ると、西洋の宗教をもっと学ぶために連れて行ってもらいたいと頼んだ。森は、彼の希望にピッタリの先生を知っていた。

先述の長沢日記に記されていた訪問の際、新井は森とともにブロクトンを訪れた。新井はそのまま逗留し、ユースの一員となった。彼は直にいろいろな事に溶けこんでしまった。森が大使の仕事のため帰っていった二日後、長沢はこう書いている。「午後、新井と私はヴァイン・クリッフに行つて、礼拝堂を掃除した……………」

すでにキリスト教についての教育を受け準備の整っていた新井は、トマス・レイク・ハリスの教を全身全霊をもって熱心に受け入れた。「キリスト教の真理 (Christian truth)」を探究するため、彼は20年の間ハリスの傍に留まり、この預言者の発する一語一語に取組んだ。文字通り取り組んだと言って良いであろう。何故なら、ハリスはカリフォルニアで書籍出版業を始める時、新井に印刷機の操作を教えたのである。1899年ハリスの共同体での生活を終え、日本を去ってほぼ30年ぶりで新井は日本に戻った。「旅行のための袋も、二枚の下着をも持たず」にであった。日本で彼は宣教師、つまり「キリストの志願奴隷」として生き、1941年94才で死んだ。林教授は、新井の優れた業績を証言し、「彼

28)『長沢伝』は次のとおり伝えている。

鼎君ハ12月ノ雪ヲ踏シテ森君ヲワシントン府ニ訪フタ。此時森ハ長沢ニ帰朝スベキヲ説イタ。併シ鼎君ハ帰朝セサル事トナッタ。鼎君此ノ当時ヲ語リテ曰ク

「ワシントンデ森ニ会ツタトコロガ彼レハ僕ニ国ニ帰ランカトイフ。宜シイ今直ニ帰ッテ行カウカトイフト、イヤ明年僕ガ帰ルカラ一緒ニ帰ラウジャナイカトイフ。明年ノ事ヲイフト鬼ガ笑フ。ソナラ僕ハ日本ニ帰ラナイ。生涯アメリカデ暮ストイフタ。森ハ貴様ハ強情デイカントイフ」

マルデ子供ノ喧嘩ノヤウナコトヲ言ヒ合フテ別レタノデアッタ。

29)「1868年の動乱切迫によって彼（新井）は仙台に帰り、玉虫左太夫等と共に奥羽越同盟の結成に奔走し、新政府への抵抗を組織した……」（日米フォーラム「森有礼とトマス・レーク・ハリス」）

はいかなる既存の組織にも属さず、彼の全生涯を神と隣人への奉仕に捧げ、いかにすれば人間が真に自由であり、独立できるかを示した³⁰⁾」と言っている。目に見える記録はないけれども、現在日本にトマス・レイク・ハリスの教にしたがうものがあると知っても、驚ろくにはあたらずであろう。ファーザーの忠実な僕、新井奥遼の模範と宣教の熱意の結果であると言えるからである。

ワシントンに日本公使館が設置され、そこで3年間の勤務を終えると、森は日本改革のためにもっとハリスの戦法を実践しようと帰国した。彼の第一着手は、同志とともに明六社として知られている啓蒙運動を組織することだった。この団体が最初に行なったことの一つは一連の公開講座を開くことであつた。これは日本で開かれた、この種の最初のものである。次に取組んだのは「明六雑誌」の出版で、蓄妾のような時代遅れの慣習に関する道徳批判の論説をこれに掲載した。林氏の言によれば、この結果「森は進歩的社会改良家として世に現われた」のである。トマス・レイク・ハリスは森のこの役割をさぞかし誇りに思ったことであろう。森に与えられた次の公職は中国派遣全権大使の地位であつた。彼は3年間北京に滞在した。彼は英国公使として6年間英国で過し、ついで1885年日本最初の文部大臣に任命されるのである。歴史家は日本の教育を他国の水準に追い付かせたのは彼の功績であるとしている。W. G. ビーズレイ (W. G. Beasley) は1963年にあらわした書物 “The Modern History of Japan” の中で、森について次のように書いている。

教育制度に20年間不変の形態を与えたのは、実に1886年春彼の手で公布された諸法令であつた……。この教育体系が20世紀において、日本の政体に基本的な統合力を付与することになった。それはまた、産業社会の緊急かつ完全な発展に基盤を与えるものであつた。

彼は西洋思想を日本に紹介する主要人物の一人であり、“Life and Resources in America” の著者であつた。勲功の結果森は1887年従二位 (子爵 Viscount) の称号を得た。彼の公僕としての生活は悲劇的結末を迎え、1889年日本の最初の憲法が弘布されたその当日に、改革に怒る保守主義者によって暗殺された。彼の秘書の回想によると、森はその式典に出席するため家を出ようと仕度をしていたが、その時、暗殺者が手に兇刃を持って近寄つたのだつた。森を良く知っていたその秘書官木村匡は、森はキリスト教をそれ程信じていなかったが、常にトマス・レイク・ハリスの教を信奉していたと回想してい

30) 「旅行のための…」 「キリストの志願奴隷」は上掲林論文 111頁。彼はいかなる既存の組織……」は99頁の「彼はどんな既成の組織にも関係しないで『私人』の立場…を堅く守りながら真箇の人間をつくる仕事にとり組んだ。…人間的な自由は、彼においては、すすんでキリストの奴隷となること以外には可能であると信じられなかった。新井は、真の自由が、如何なるものか、またキリストの志願奴隷であることがどういうことであるかを身をもって示した」に相当すると思う。正確な出典不明。

31) 「1886年10月19日 従二位に叙せらる」「1887年5月9日 華族に列せられ子爵を授けらる」(前掲「森有礼年譜」)

る。木村の見解では（ここで述べるまでもないことかも知れないが）ハリスは「森の思想と人格に終生絶えることのない強烈な影響」を与えたという³²⁾。森の死後、最後の栄誉が与えられ、国の発展に寄与した功にむくいるため、皇室は彼を正二位に叙した。

こうして見てくるとき、ハリスの共同体で一時期を過した20有余人の日本人のうち、注目すべきものが3名いる。森有礼、新井奥邃、長沢鼎である。彼ら3人すべてが武士であり、すべて政治的理由で日本を去った。各人が成年期に達しようとする国家の問題に解答を求めようとしたのである。林教授はこう書いている。

当時外国にいた日本人は一般に祖国のために西洋文明を学ぼうという非利己的な動機をもって行動した愛国者であった。彼らは西洋とは全く異なった世界で育てられ、多かれ少なかれ、彼らの個性・人格・学識において特性を備えていた。だから、西洋世界と関係を持つにいたった時、彼らはその思想と人格に最も深刻な衝撃を受けた。彼らの経験の中に、われわれは、日本がその近代化の過程で直面した諸問題の反映をその原初形態で見ることができる。³³⁾

衝撃のいくがしかはトマス・レイク・ハリスであった。これら3人のすべてが、ハリスを発見した、というか、ハリスに発見された。3人すべてが彼の教えを摂取した。しかしこの「生活拠点」を出て彼らが辿った道は非常に違っていた。森の場合近代日本を形成する体制を形造るため、俗世に足を踏み入れた。新井の場合、この怒りに燃える若い武人は、ハリスの内面的哲学に向い、日本のシッダルタ（Siddartha）になるその日のためのエネルギーとしてそれを貯えた。彼は日本の辻々を徘徊し、行く先々で教えを説いた。長沢鼎は古い日本を受け継ぐ子供であった。長沢にとって、トマス・レイク・ハリスとはアメリカ化すること（Americanization）を意味した。彼はハリスと留まることを選んだ。やがてこの預言者の「養子（adopted son）」のように見做されるようになった。そして新生社の最後の重要資産を相続した。それはファーザーに対する忠誠にもよるが、同時に彼が比較的若かったという理由によるものである。

他の人々と違って、長沢は決してハリスの影響に圧倒されることはなかった。彼は逞しい精神の個体に成長し、彼自身の哲学に適した思念をハリスの思想の中から拾い上げ選択した。彼の伝記を書いた川勝〔鷲津〕はこう記している。

長沢鼎はハリスの激励を受けながら、ハリスの宗教を学んだが、この二人はその真の意味について、いつも違った考えを持っていた。ハリスは人間を愛しその美を知っていたが、薩摩の精神が原因で、鼎は決してこの感覚を育くむことがなかった。鼎はこう言っている。

32) 「…森の伝記を書いた彼の秘書・木村匡の証言にしたがえば、森はキリスト教は信じていなかった……が、ハリスを『信仰して』いたと言い、またハリスの説が、最後まで森の議論の基礎になっていたと言い切っているのである」（上掲林論文98頁）

33) 同趣旨の記述が上掲林論文の各所に散見されるが、正確な引用箇所は不明。

ハリスは人間の体は神の宮であると教え、自分はそれに同感である。食物と衣服はいかに貧しいものであろうと、身につけるに清潔であり食するに清潔でなければならぬと。またこうも言っている。自分は教会に行かない。自分は教会が人間の清められるところであると感じない。自分は誰かの説教を聴くより、むしろ自ら身を処するだろうと。³⁴⁾

長沢はハリスが亡くなると、まごう方ない長沢その人になった。カリフォルニアの共同体で彼自身何かしら伝説的な存在になった。彼は葉巻を燻らせ、ツイードの服を着、スコットランド風に「アールの音 (burr)」を響かせる英語を話す、頑丈な、礼儀正しい、手広く事業をしている小さな日本人として記憶されている。彼はブドウの樹と、ブドウ酒造りの問題に関しては誰よりも知識があった。そして利き酒の「名人 (expert)」として醸造所から醸造所へと四輪馬車を度々走らせ、近隣の人々を助けてまわった。時々彼は、親友ルーサー・バーバンク (Luther Burbank) の会社にでかけた。ブドウ栽培について、しばしば彼の意見を聞くためであった。1934年、11日後に83才の誕生日を控えて、長沢は亡くなったが³⁵⁾、その時の地方紙の死亡欄を見れば、彼が築き上げた俗福な地位と、彼が日米問題に果たした役割が良くわかるのである。

ファウンディングローブの家と醸造所とブドウ畑は北カリフォルニアの観光名所の一つになった。アメリカのこの地域を通りがかる名士が長沢を一寸訪ねて行くのであった。

どの人も丁重かつ入念なもてなしで迎えられた。長沢は何千という有名な客に、この同じもてなしを与えたのである。多くの人々がこの日本君子の才気煥発の精神に興味を持ち、彼と同席する楽しみのため、しばしば重ねてこの地を訪れた。彼らの中には著名な詩人エドウィン・マークム (Edwin Markham) の名もある。彼は一時長沢とファウンディングローブで数年共に暮し、この君子の最も親しい友人の一人となった。

マークムが後年再びそこを訪れた時、長沢はこの詩人を讃えて、粋をこらした宴会を催しサンタローザの人々 150人を客としてもてなしたのである。

ファウンディングローブで催された人目を惹く輝かしい事件の一つは、1915年〔1924年〕日

34) 『長沢伝』より原文は次のとおりである。

ハリス先生ノ宗教ハ鼎君シバシバ之レヲ聞イタ。而シテ之レヲ学ンダ。併シハリス先生ノ悟道ト鼎君ノ悟道トハ同ジデナイ。ソレハ当然必至ノ心理デアラネバナラス。

ハリス先生ハ人間愛、人間美ニ徹底シタ。然レドモ鼎君ハ人間愛ニ徹底スルノ機会ヲ得テ居ラナカッタト思ハレル。ソレハ薩摩ノ健児ヲ作ッタ道德ガ日本人タル鼎君ノ血脈ニ遺伝シテイタカラデアルマイカ。……………

鼎君ハ常々近親ノ者ニ語リテ曰ク

「私ハ自分ノカラダハ神ノ殿堂デアルトイフハリス先生ノ教ヲ信ズル。自身が神ノ宮デアルカラ、ソレヲ清潔ニ保存セネバナラス。故ニ衣服ハ破レテモ清潔ナモノヲ着、食物モ材料ノ如何ニヨラズ奇麗ニシテタベル。ソレハ我々が純潔ヲ保ツ所以デアル。私ハ教会ニ行カナイ。教会ハ私ヲ清ムル所ダト信ジナイ。私ハ他人ノ説ヲ聞クヨリモ、自分自身ヲ節制スル事ニ努メル」ト。

35) 1934年3月1日午前9時死亡。正確には82才を若干越えている。彼の生年月日に混乱が見られるのは和暦の西暦換算上の誤りによるものかと思う。

本帝国天皇の要請によって長沢に旭日章 (the Order of the Rising Sun) が与えられたことである。³⁶⁾ この叙勲は、サンフランシスコで催されたパナマ・太平洋博で日本からの展示を他と協力して実現させた功労と、日米の福利に寄せた彼の関心に対し酬いるためのものであった。

彼はプロクトンの台所から長い道程を歩んできた。彼の死亡記事に「公 (Prince)」という敬称がたまたま用いられた点からもわかるように、彼の重要性は限りもなく大きくなった。彼は有力者たちがまわりに集まることを愛した。またこの「ファウンテングローブの貴公子 (The Baron of Fountaingrove)」は、禁酒法下で贅沢な晚餐を提供し侍医や弁護士や取引客のためにファウンテングローブ産のワインとブランデーの倉庫を開くので有名だった。郵便を受け取るためお抱え運転手とビュイックで毎日町に出る時には「ファウンテングローブから来た日本の皇族だ」と道端で囁きが交わされるのであった。彼は終生結婚しなかった。彼が日本に何度か帰国したその最初の時、親戚の者が結婚をとりまとめようとしたこともあるが、「あまり忙しくて結婚できない」と彼がしじゅう言っていたと、彼の姪が回想している。とはいっても彼の彼は忙しくて一族の絆を忘れるようなことはなかった。3人の甥とその家族を日本から連れてきて、自分の立派な生活を彼らにも分け与えたのである。

1964年、日本のテレビ局がサンタローザにやってきて、西洋で開拓者となった日本人に関するシリーズの一つとして長沢鼎のドキュメンタリー・フィルムを作製した。彼は「合衆国でブドウ栽培とブドウ酒製造の仕事をした最初の日本人」と脚本に書かれている。ナレーターは「彼の業績は偉大なものである」と結んでいる。

テレビ脚本の作者は彼のことを良く知っていて、彼を長沢「公」(“Prince” Nagasawa) などとは呼ばなかった。しかし生前彼に提供されたこの肩書やその他いろいろの肩書を、鼎自身が辞退したと推量できるような手がかりはどこにもない。彼は黙ってこの臣下の礼を嘉納したのである。彼は巨匠ハリスの足下に居て、神秘的風貌を備える術 (fine art of being mysterious) を立派に会得していたのである。

36) 1924年2月11日 内閣総理大臣訓令にもとずき勲5等雙光旭日章を授与されている。